

特集

ビッグイベントが もたらすもの

What comes with big events

特集担当主査：三谷 卓摩

特集担当副査：増田 貴之

特集企画担当：泉 真利子、浦田 淳司、川崎 裕太郎、中野 太雄

ABSTRACT

Big events such as the Olympic Games and World Expositions have long captured public attention and often serve as catalysts for urban development. The Osaka-Kansai Expo 2025 and Tokyo 2020 Olympics are recent examples that highlight the strong connection between civil engineering and big events. These events not only require construction of venues but also demand large-scale infrastructure for transportation, accommodation, and urban functionality. The pressure of fixed deadlines and public scrutiny necessitates advanced project and transport management, as well as sustainable approaches.

This issue explores how civil engineering contributes to mega-events and what these efforts leave behind for cities and societies. It features cases from national events like the Osaka-Kansai Expo, Tokyo 2020, and regional initiatives involving local sports clubs and local stadiums. The issue also examines future-oriented practices, including sustainable procurement and long-term urban planning. Through our articles, it aims to provide a comprehensive view of how big events intersect with infrastructure and community development. We hope this issue will deepen readers' understanding of the evolving relationship between big events, cities, and civil engineering in Japan and beyond.

ビッグイベントと 土木の関係

オリンピックや万博といったビッグイベントは誰もが耳にしたことがあるだろう。日本では、この2025年4月から10月の半年間にかけて行われている大阪・関西万博や2021年に行われた東京2020オリンピック・パラリンピック競技会（以下、東京2020）は、世間の耳目を大いに集めた。また、1964年の東京オリンピックや1970年の大阪万博（日本万国博覧会）は、高度経済成長時代を象徴する出来事として、今もなお語り継がれている。

ビッグイベントを開催するにあたり、競技場や会場そのものだけでは

なく、多くの観客を受け入れるための交通や宿泊などの施設の大規模な整備も必要となる。そのため、ビッグイベントと土木の関係は案外深い。また、日本に限らず、ビッグイベントの開催を契機として、インフラ整備を早期に実現し、都市機能を発展させた例は枚挙にいとまがない。近年、成熟した都市でオリンピックや万博が開催されることも増え、インフラ整備そのものに加えて、輸送などのマネジメントの高度化も求められる。さらに開催日に間に合うように莫大な整備を行う中で、厳格なプロジェクトマネジメントが求められ、また、大きな注目を受けるからこそ持続可能なアプローチであるかどうかとも問われる。

ビッグイベントは 何をもたらすか

ビッグイベントそのものには、開催前も開催後もスポットライトは大いに当たる。また、展示内容や競技結果とともに、「大屋根リング」や「国立競技場」といったイベントの象徴である建築物も多くの人の記憶に残るだろう。

一方、イベント開催に至るまでのさまざまな計画や準備は、時に（遅れや拙さを）批判され、耳目を集めるが、開催後に時間がたつてから振り返る際には、（社会的には）注目を受けない場合がほとんどである。準備

はうまく進むことが当たり前と思われているからこそとも言える。しかしながら、厳格な開催日設定や注目・規模の大きさから、準備においても多くの工夫が詰まっており、振り返る中で得るものは多いだろう。また、土木事業は長い時間をかけて評価さ

れるべきものであり、イベントを契機とした都市機能の高度化による市民への恩恵は、イベント後にこそ、もたらされるものである。そこで、本特集では、これまでのビッグイベントにおける土木にまつわる取り組みを振り返り、そうした取り組みが、土木分野や都市・社会に何をもたらしたかを考えてみたい。

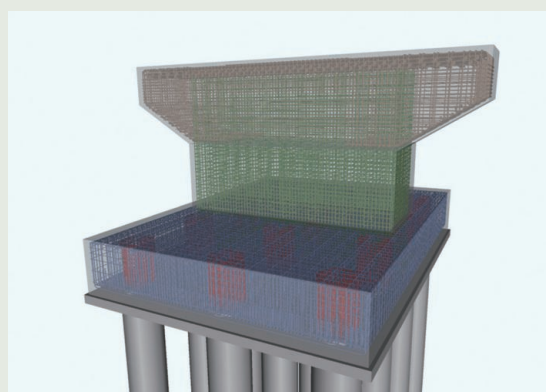


写真1 夢州北高架橋（上：CIMモデル（提供：森組）、下：完成後（提供：日本車輛製造））

本特集の構成

本特集では、直近の大阪・関西万博や東京2020に加えて、さまざまな時間軸のビッグイベントをピックアップし、ハード・ソフト隔てなく、ビッグイベントと土木の関係を俯瞰的に理解することを試みたい。また、日本という国全体にとつてのビッグイベントだけでなく、各地におけるビッグイベントも取り上げる。地方創生がちまたを賑わせる中で、スポーツクラブ、スタジアムやアトイイベントが地域に与えるインパクトは大きい。

特集では、まず、万博およびオリンピックといったビッグイベントにおける、プロジェクトマネジメントや輸送マネジメントの取り組みを紹介する。冒頭の座談会では、大阪・関西万博のパビリオン整備のための夢州北高架橋（写真1）の早期暫定開通にむけた取り組みを伺った。加えて、大阪・関西万博、東京2020、愛知万博における来場者輸送のためのインフラ整備やマネジメントに関する記事を掲載する。それぞれの時代にお

ける技術や社会状況の変化を三つの記事から読み解くことができよう。

次に、地域におけるビッグイベントに着目し、スタジアムと地方スポーツクラブというトピックを取り上げる。記事では、地域の中に集う場所があることの意義を示しており、イベントに人が集まること、集まって生じるアクティビティや充実感が街や地域に還元されていくことを感じてもらいたい。

最後に、未来のビッグイベントにむけて、四つの記事・コラムを掲載する。ビッグイベント開催には欠かせないものとなっている持続可能な社会のための公共調達、過去と未来の具体事例として1998年の長野五輪開催前の北陸新幹線整備、2027年の横浜での国際園芸博覧会にむけたまちづくりに加えて、最後の鼎談では、人文地理・建築・都市の三つの分野の専門家により、ビッグイベント開催の都市への功罪を議論した。

本特集を通じて、ビッグイベントと都市、地域、土木のこれからの関係性についての理解が、一歩でも深まれば、幸いである。